審査の結果の要旨

氏名　枝川　裕一郎

論文題目　Distinctive Features of Japanese Architecture and
What Is at the Root of Japanese Creativity
(日本建築の特質そして創造性の根底にあるもの)

Subtitle：Parts Precede the Whole
(副題：部分から全体へ)

本論文では、日本の建築の特質そしてそれを生み出す日本人固有の特性、それらを掘り下げて考察すると共に、更にはそうした特質相互の関連性並びにそれらの背後にある日本人のものの捉え方を掘り下げ、それらがどのような建築を産み出すことになるのか追及している。こうした日本人の建築デザインの過程に対する考察は、今までも多くの建築家／研究者によって論評されてきたが、夫々個別にその考えを論じて来たきらいがある。本論文では、そうした既存の概念を包括的に整理し、独自の視点から俯瞰的に見ることで、様々な特質を並列的に捉え、横断的な説明を試みている。

本論文では、日本人の創造の過程は、「部分から全体へと考えるのであって、全体から部分へ至るのではない」、「全体を分割して部分に向かうよりも、部分を積み重ねて全体に至る」、「すなわち部分が全体に先行する」とする特質を持つと考えている。そして、建築において「部分が先行する」とは「どういうことを言うのか」、「どういうことがそれをもたらすのか」、「それがどういう結果を生み出すのか」、これ等の視点を論の中心に据えて考察を進めている。日本人の建築における創造の組み立てと、そのバックグラウンドについて掘り下げ、その感性・発想方法・結果としての形態と特徴について分析・検証することを通して、日本建築の特質を説明する筋道を構築しようとしている。

本論文は、上記「本研究の狙い」をまとめた第一章と、本論となる第二章～第五章、及び「まとめ」となる第六章、計 6 つの章で構成されている。

第二章では、日本建築の特質の中でも、日本人の創造活動の基本スタンスとなる、自然とのかかわり合い方、生活の有り様、生活信条やこだわり等をベースとした特質を抽出している。具体的な事例写真に依拠して説明することを通して、その特質がどう云うことを指すのか、事例のどこがそうなのか詳述し、確かにそうだと納得性のあるものとしている。

第三章では、非対称や有機的形態と云った日本建築の特徴的形態や、奥の概念を始めとする日本人独自の感性に根差す形態等、日本建築の構成上の特質を取り上げ、具体的写真事例を

多用して説明している。第二・第三章を通じて 12 の日本建築の特質を抽出し、今まで個別に語られることが多かった日本建築の特質について、網羅的な整理を可能とし、さらなるロジックの展開を可能としている。また、12 の特質のそれぞれが、本論文の副題である「部分から全体へ」とする日本建築の特質の根源的捉え方と、密接な関係にあることを関連付けて説明している。

第四章では、建築において「部分から全体へ」とはどういうことを言うのか、何故そうなるのか、との視点に立って、新旧建築事例の構成上の特性を検証している。そして、西欧文化における取り組み方と大きく異なる、「部分から全体へ」と構築される日本建築の特質を詳らかにしている。また、部分から出発して、結果として全体を成立させるために必要な、拠り所となる構成原理の存在にも着目している。日本人は、部分から全体を構築するという、自らのものづくりの取り進め方について、それを説明して正当化し、実践する論拠を見出そうとしてきたといえる。

第五章では、「部分から全体へ」とする創造の過程を現代において継承し、顕著にその影響が現れている事例を、建築単体・建築群・都市計画の各レベルにおいて具体的に検証し、「部分から全体へ」とするプロセスがもたらす影響について考察している。さらに自らの設計事例にも言及し、本論文で取り上げた日本建築の特質に基づく手法を、設計のコンセプト造りおよび具体化作業に持ち込み、こうした手法が如何に現代の建築設計に有用であるか、自ら実践した経験を取り上げている。「部分から全体を構成する」との取り進め方が、実際の設計の場面で、極めてうまく機能することを検証している。

第六章では、前各章を総括し、本研究の成果を取り纏めている。日本建築の多様な特質を捉え、取り上げた日本建築の 12 の特質が、共通して「部分から全体へ」とする見方を介して、関連付けて説明できることを、ダイアグラムを用いて示している。日本建築の意匠研究において、「部分から全体へ」とする捉え方を、創造過程における中核と位置づけて議論を展開したことは、全く新しいスタンスであり、ここで得られた知見は、さらなる研究の発展につながると期待される。

最終審査会では、詳細な事例分析によって日本建築の特質を整理・体系付けたことに加え、それが英語論文として提出されたことも高く評価された。英語化の過程で、論文の描くストーリーがより明確に、論理的に強化されたことに加え、これまであまり多くなかった日本人研究者による日本建築研究の英語発信として、高く評価された。本論文は、その意味で大きな意義があり、日本建築研究に関心を寄せる諸外国の研究者に対しても有益で、建築学の発展に大きな貢献となるであろう。

よって本論文は、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。